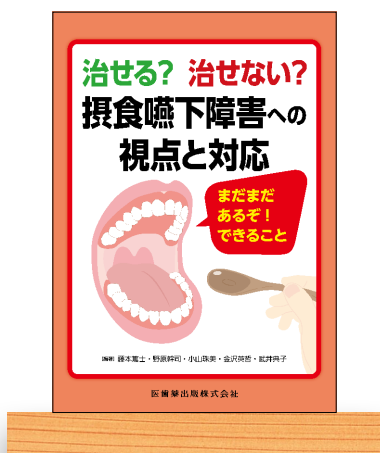


「もう治らない」と言われた摂食嚥下障害  
 できることがもっとある！



### 治せる? 治せない? 摂食嚥下障害への 視点と対応 まだまだあるぞ! できること

藤本篤士・野原幹司・小山珠美・金沢英哲・武井典子 編著

B5判/216頁

定価 5,940円 (本体 5,400円 + 税 10%)

医歯薬出版 (2022年9月)

公益社団法人日本歯科衛生士会 元会長  
 評・金澤紀子



本書を手にとったとき、「治せる? 治せない? 摂食嚥下障害への視点と対応」というタイトルに続き、「まだまだあるぞ! できること」というフレーズが飛び出し、これまでにないメッセージ性を強く感じました。「本書のねらい」が冒頭の解説で明解に語られ、Part 1「どこまで『治せる?』『治せない?』摂食嚥下障害に何ができる?」、Part 2「さまざまな臨床症状と対応」、Part 3「事例紹介」と続き、さらにはさまざまな課題がコラムで例示されています。各先生方が専門的な立場から臨場感あふれる議論を展開され、その内容は正鵠を得ています。特にPart 1の「Introduction」では、企画意図とともに、「食べさせる」「食べさせない」の視点から、「本当にもう、口から食べられないのか?」と一歩踏み込み、臨床現場で起こってい

るさまざまな事例や対応のプロセスが真摯に紹介されています。また、「多職種による臨床倫理的アプローチは、患者さんの意思決定推進のための重要なツールである」とし、これらの議論を通して、摂食嚥下障害への対応はEBMを中心とした医療者の視点だけでなく、患者さん・家族との対話や物語、そして多様性を重視した医療であるべきとの思いが伝わります。医療・介護・福祉の関係者をはじめ、患者さん・家族を含む多くの人に読んでいただきたい内容です。

人口の高齢化に伴い、加齢による機能低下やサルコペニアなどの複合的な問題が壁となり、機能障害などの回復が困難な症例が増加しています。これらの背景を踏まえ、厚生労働省は「治す医療」から「治し支える医療」への方向性を示し、「摂食・嚥下等人々の生活の基本を支える歯科医療においても、チーム医療の下で、歯科医師や歯科衛生士等と、医師や看護師等との連携を進める」と提言しています<sup>1)</sup>。歯科衛生士はこれまで、口腔衛生管理を中心とした疾病予防の視点から、その役割を果たしてきましたが、さらには、「食べる」「話す」といった口腔機能の維持・回復にシフトし、生活機能を支える視点からその役割を果たす必要があります。

人々の「口から食べたい」との願いは切実であり、生きる力の源でもあります。本書は、さまざまな状況にある患者さんやご家族に寄り添い、摂食嚥下障害に取り組む医療者への支援書であり、とりわけ、歯科衛生士がチーム医療の一員として学び、その視点と対応を共有するうえで“必携の書”です。本書の編著者の一人で、故人となられた武井典子さん（日本歯科衛生士会元会長）は、文中で「歯科衛生士は摂食嚥下をトータルで学んでほしい」と述べ、「まだまだあるぞ! できること」と呼びかけています。ぜひともお薦めしたい1冊です。

1) 厚生労働省、安心と希望の医療確保ビジョン (2008年6月)。